

新刊書紹介

水辺のいきもの

浅間 茂・田中正彦
柄澤保彦・岩瀬徹著



本書は谷津（やつ）に棲む生物を対象としている。近年、谷津の生物は水面の埋め立て、基盤整備による水田の乾燥化、水路のコンクリート化、水質の悪化、耕作放棄による群落の遷移の進行、外来種の繁殖など、さまざまな変化によって生活が圧迫され、水辺環境の保全をどうするか、現在、大きな課題となっている。

本書は、5部から構成され、まず1部では水辺の生きものの生活の場としての植物を抽水植物（ヨシやガマなど地下茎が水底の中をはい、茎の下部が水に浸かり上部が高く伸びて葉を広げる形をしている植物）、ミゾソバ、イヌホタルイ、チゴザサなど湿地・休耕田・水路の植物、藻類やヒシなどの水草に分けて40種を紹介している。

2部はトンボ編で、主要なトンボ50余種について山地の溪流、川の中流域、平地の池沼、樹林に囲まれた湿地、草が茂った湿地、水田・休耕田・用水路、汽水域などの生息場所別に取り上げ、トンボの特徴、分類、生活史を解説する。

また生物学的な話題だけでなく、神話に登場するトンボ、トンボの童謡や唱歌、洋の東西にみるトンボ観といった文化的側面についても幅広く紹介している点がユニークである。

3部カエル編では、両生類の特徴からスタートし、身近に見られるカエル12種の形態、分

類、分布、生態を解説する。続く「カエルの生活」では代表的なカエルであるアズマヒキガエル、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル、シュレーゲルアオガエル、ウシガエルの生活史、繁殖、成長、減少した理由について多くの写真を使って詳述する。トンボ編同様、カエルの文化的側面についても紹介している。

4部はメダカ編。「世界のメダカ・日本のメダカ」でメダカについて概観したあと、メダカの一生（産卵、孵化、成長、越冬、寿命、移動）について解説する。続いてメダカと外来種のカダヤシ・グッピーの見分け方に言及し、「メダカがすむ環境」の項では悪化する現状を考察する。さらにタモロコ、モツゴ、フナ、タナゴ、ドジョウ、ナマズなどメダカとともにくらす魚たちの分類・分布・生態についても解説している。

最後の5部は4人の著者による座談会形式で、谷津の自然環境の変化に対する生きものの変化、農業活動の変化によるいきものへの影響、環境保全活動、環境教育などについて意見交換をしている。いわば本書の総まとめともいえる部分で、なかなか一筋縄では解決しない谷津の保全や復活という問題について、その解決のヒントを模索する。

本書の著者陣はいずれも千葉県生物学会の会員で、長年にわたり千葉県を舞台に調査・研究を行い、同時に生物教育、環境教育に携わってきたベテラン揃いである。したがって、フィールドも千葉県の谷津が中心になっているが、水辺のある他の地域でも十分に参考になる普遍的な内容を含んでいる。

本体価格 2,400 円、発売：全国農村教育協会
(TEL03-3839-9160, FAX03-3833-1665,
メール hon@zennokyo.co.jp)。